

遺跡の発見から保存、国指定史跡へ

接待館遺跡は、一関遊水池事業衣川左岸堤防工事に伴う発掘調査により、堀と土塁によって区画された 12 世紀の大規模な遺跡であることが判明しました。このため、国土交通省は接待館遺跡の保存のために堤防のルート変更を決定、平成 22 年には、平泉の展開が衣川北岸にまで及ぶことを示す遺跡として、国指定史跡「柳之御所・平泉遺跡群」に追加指定されました。

遺跡名の由来

「接待館」の名称は、安永 6 年（1777）『下衣川村風土記御用書上』に古館として記された「セツタヤ（接待）館」に由来します。『下衣川村風土記御用書上』では藤原秀衡の母の居館と記されています。

出土した遺構

土塁は、発掘調査の成果や昭和 20 年代の航空写真、明治 17 年頃の絵図などから、堀跡の内側と外側に存在したと想定されます。土塁の規模は、基底幅約 5.5m、高さ約 1 m で、土には堀を掘削した際に出た礫が多量に含まれています。

堀跡は、幅 8 ～10m、深さ約 2 m の規模で、東西約 120m、南北は衣川に削られ全長は不明ですが、現状で 65m 以上あります。

中央部で発見された溝跡は、幅約 3 ～4 m、深さ約 1.2～1.6m の規模で、12 世紀後半の手づくねかわらけが大量に廃棄されていました。

掘立柱建物跡は、堀跡から東に約 40m の場所に位置します。2 間×3 間の母屋に四面に庇がめぐるので、四面庇建物といわれる 12 世紀の平泉では多く見られる形状の建物です。規模は桁行 110m、梁間 88m、面積約 30 坪と規模の大きい建物です。

なお、遺跡の南側は、衣川の浸食により失われたと推定されています。

出土した遺物

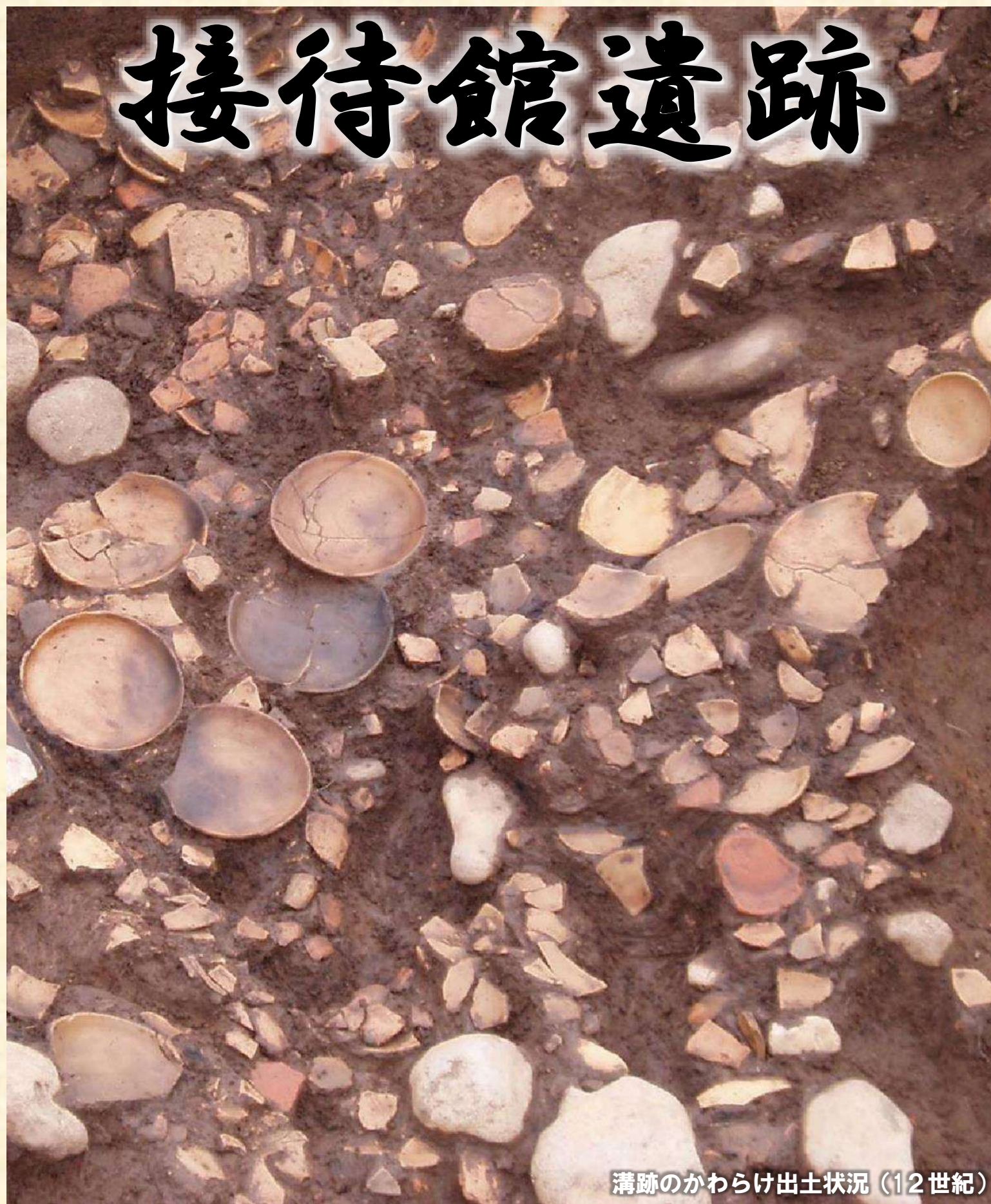
接待館遺跡からは、かわらけ、貿易陶磁器、国産陶磁器、鉄製品などが出土しています。このうち量が最も多いのは、かわらけで、発掘調査した箇所（堀跡や溝跡は一部しか調査をしていません）だけでも約 117 kg のかわらけが出土しています。直径 16 cm のかわらけ 1 個の重さは 190 g 前後なので、単純に計算しても 600 個以上のかわらけがこの遺跡で使われたことになります。これに対し、貿易陶磁器は白磁四耳壺や椀、国産陶磁器は常滑産や渥美産の甕などがわずかに出土しています。このような傾向からも、接待館遺跡は、生活痕がとて希薄な遺跡といえます。

奥州市教育委員会 歴史遺産課
岩手県奥州市江刺大通り 1 番 8 号 TEL : 0197-35-2111
平成 21 年 9 月発行、令和 3 年 5 月改定

国指定史跡

せ っ た い だ て い せ き

接待館遺跡



奥州市教育委員会

接待館遺跡の概要

接待館遺跡は、中尊寺の北、衣川の対岸に位置します。

遺跡は、堀と土塁によって衣川に向かって弧を描くように東西 120m、南北 65m の範囲が楕円形状に区画され、さらに区画内部の中央には、平面コの字状の溝跡により東西 40m、南北 20m 以上の区画があります。堀跡、溝跡からは多数の 12 世紀後半のかわらけが出土していますが、特に中央部の溝跡からは完形のかわらけが多量に廃棄された状態で出土しています。堀と土塁による区画の内部には、溝跡以外の遺構が全く見られませんが、区画外の東側では、12 世紀の四面庇の掘立柱建物跡が 1 棟確認されています。

遺跡の性格は、今のところ特定できていませんが、完形のかわらけが大量に廃棄されていることから、12 世紀に規模の大きな儀礼や宴会が行われた場であることは確実です。しかし区画内部に建物跡や井戸跡などが存在しないことから、「館」の可能性は低いと考えられます。



土塁跡



掘立柱建物跡



堀跡



中央部の溝跡